

『語學をやる覺悟』

關口存男

△本当に語學を物にしようと思ったら、或種の悲壯な決心を固めなくっちゃあ到底駄目ですね。まづ友達と絶交する、その次には嬢アの横っ面を張り飛ばす、その次には書齋の扉に鍵を掛ける。書齋の無い人は、心の扉に鍵を掛ける。その方が徹底します。

△意地が汚くなくっては駄目です。慾張ってゐなければ駄目です。うんと功利的でなければ。猶太[ユダヤ]人が金をためるやうに、なるべく執念深く、しっこく、うるさく、穢[きたな]く、諦め悪く、非常識に、狂[きちがい]じみて、がつがつと、居候が飯を食ふやうに……兎に角しっこく、しっこく、しっこく。

△あっさりした氣持を持った亡国的日本人なら其の邊にいくらだって転がってゐます。併しそんなのは何人ゐたって仕様がな。ちっと『しっこい』のがゐなければ、梃[てこ]でも動かないのが。諦めの悪いのが。がつがつした下品なのが。

△斯う云ふ事をいふと、頭っから反感を持つ人があるかも知れません。よろしい、反感をお持ちなさい、但し學問はおやめなさい。殊に語學は。(語學だけではないでせう?)

△たとへば、子供が御飯をたべるのを見てゐて御覽なさい。傾向が二つあります。或種の子供は、好いおかずだけ先に喰べてしまって、あとをお茶漬にして好い加減にすましてしまひます。ところが、十人に一人位は、好いお菜だけ窃[そつ]と横へ取つておいて、まづ不味[まず]い方のおかずから喰べ始めるのがある。……斯う云ふ風なのは、それを側で見ていると、心事が陋劣で、乞食のようで、とても正視できない。ところが、こういう風なのが尊いのです。學者になるメンタルテストだったら、私は此の方を採用したいと思いますね。學者ばかりとは限りません。

△意地は汚いほど宣しい、締めは悪いほど結構、凝り性で、業欲で、因業で、頑瞑で、意地っ張りで、人に負けるのが大嫌ひで、野心家で、下品で、交際[つきあ]ひ憎くて、可愛げがなくて、『こんな奴と同居したら嘸[さぞ]面白くなからう』と云つたやうな性格……私はそんなのを尊びます。かう云ふ一面を持たうと欲しない人は、本當に勉強はよしたが好い。殊に語學は。殊にドイツ語は。

△勿論人に好かれない事は覺悟の前でなければなりませんよ。人に好かれてどうなるものですか。人にだけは好かれない方がよろしい。そんな量見[りょうけん]だけは決して起こす可からずです。餘計なことですからね、『人に好かれる』なんて、人に好かれるやうな暇があつたら、その暇にしなければならない事はいくらでもあります。

△今日の社会は(今日の社会には限りませんが)決して價值ある個人を欲してはゐません。だから、社会の欲する無價値な人間になるか、社会の欲せざる價值ある人間になるか、問題は此處です。

世間はどんな人間を好むか?『交際[つきあ]ひ好い』人間を好みます。つまり、一緒にお茶でも飲める様な人間をですね。一緒にお茶が飲めなくつちや仕様がありませんからねえ!

ところで扱[さ]て、世間様と御一緒にお茶を飲むためには、やはり世間様と一緒にお茶を飲むやうな人間である事が必要です。さうでない人間は何處か斯[か]う煙たくて、しんみりしませんからねえ。頭の中にお茶話以上の考へを持ってゐる人間なんてのは、どう見ても人に好かれる方の型ではありません。努力しつつある人間なんてのは、まったく興ざめですからね。座が白けますからね。

△世間はそんなものです。さういふ世間の真只中であつて、殊に獨逸語でも一つ叩

き上げようと云ふ時には、實際一つの悲壯なる決心が必要です。獨逸語も、今日では、もはや數年前の或種の過渡期を通過して、今はもう殆んど英語と同じほど一般的になってきました。ちよっと嚙ったからと云って、それでもう一かど獨逸語を心得たやうな顔の出来る時代は、もう一寸過ぎ去ったと云っても好いではありませんまいか。

『俺は勿論語學者なんぞに成らうとは夢にも思はない、俺にはもっと高尚な對象がある、その單なる手段として語學をやるのだ』——そんなやり方では到底駄目です。△既に先進國を前に控へた新興國の新興時代は、すべての人が語學者でなければならぬ。——過去を見ればわかります、漢文が出来なくて支那印度の精神文化を受け入れ得た學者があつたでせうか。

△要するに、そんな言ひ草は通用しません。『ちよっとやって見る』とか、『手段としてやる』なんてやり方はありません。『やる』以上は『やる』。やるに二つはありません。

△凡そ、時間の上から考へても、エネルギーの損失の上から考へても、また自己教養の立場から考へても、さう大して深入りするつもりでも無い物を一寸した興味でやって見るほど馬鹿馬鹿しい努力はありません。一寸やって見るための對象としては、獨逸語なぞは恐らく最も不適當なものでせう。

△乃木將軍の失敗談を御存じですか？彼は旅順を強襲によって一息に乗取らうとして失敗しました。深山の人命を犠牲にしたのち、やっと『打算と耐忍と根本的な態度』とによって、ぢりぢりと迫らなければ駄目だといふ所に氣がついたのでした。獨逸語は持久戦です、まづ腰をおろして考へませう。中腰の考へと、胡坐[あぐら]を組んだ上の考へとでは、考へがおのづから違って來ます。坑道を掘って敵塞の『下』に迫りませう。大岩層に逢着したら、コツコツと、一片また一片と岩を崩して行きませう。相手は岩ですよ。敵ではありません。敵だの勝利だのと云ったやうな事はもはや当分の間問題ではありません。それはもはや戦争ですらありません。仕事です。涯[はて]しなき勞作です。無限の穿掘です。拭練です。凝視です。根くらべです。

目標は無限の彼方[かなた]にあります。そして鼻の先は岩です。そして岩の背後は岩です。そのまた背後も岩です。岩、岩、岩、岩、當分は岩です。掘りませう！

獨逸語大講座月報（第一）

（昭和六年六月『獨逸語大講座』（全六卷）の第二卷付録）

『くそ勉強に就て』

關口存男

ただモウとにかく机にかじりついて遮二無二、馬車馬のように、人に笑われようが、頭の好人たちにどう批評されようが、そんな事には一切お構いなく、めくら滅法に、とにかく勉強勉強また勉強、「あの男少し頭がどうかしてやしないか」と云われるほど勉強に凝ってしまつて、友達には少々敬遠され、親兄弟にはトックの昔に見離され、學校の先生には苦笑とも微笑ともつかぬ或種の非常に特殊な表情を以て注目され、役人とか、警官とか、新聞記者とか、犬とか、自動車とか云うような現実界の不可抗力からは、時々劍つくを喰ったり、どなられたり、尋問されたり、吠えつかれたり、突きとばされたりしながら、それでも感心に乗るべき電車にはチャンと乗って、家から學校へ、學校から家へと、マア大体無事にたどり着き、たとえば決して列車のホームを間違えたために月世界や火星まで行ってしまつて、着いてからはじめて氣がついた……なんて失敗はしたことがないと云う……（これが實に大變な努力なんで、あらゆる夢遊病的行住坐臥にもかかわらず、こういう些細なところにも如何に懸命の努力が佛われているかという所にも注目して頂かないと、私が今から紹介しようとする或種の特種な市民タイプは、神にも佛にも見離された上、おまけに同胞人類にまでのけ者にされる危険があるのです！）……

エート、文章が暴走しちやって、どういう副文章で書き起したのか思い出せなくなっちやったが、とにかくマア、そういう型の人間があるということを云おうとしたのです。稱してクソ勉強と云います。あんまり體裁の好い型じゃありません。どっちかと云うと滑稽な型です。滑稽と云っても、落語の種になるような滑稽ではなくて、「苦笑」という型の滑稽ですな。つまり、おヘソが宿換えしたり、お腹の皮がよじれたりはいしない。むしろ「顔がゆがむ」と云った方が好いかも知れない。顔はたしかにゆがみます。普通よく「顔まけ」ということを云いますがこれも或いは此の型の滑稽に面した場合の苦しい微妙なおかしさのことを云うのでしょうか？顔にも勝ち負けがあるということには今はじめて気がついたが、なるほどそう云えば人間社會という所は、何処へ行っても、顔と顔とが張り合ってむしろ顔ばかりあってそのうしろにはなんにもないことすらあります。あると反っていけないらしい。とにかく、つぶれるのも顔、立てなくちやならんのも顔、廣いのも顔、売るのも顔、かかわるのも顔であってみれば、「負ける」ということは實際考えられますね。甘い氣持で相手を見くびっていると、實際がこっちの思ったような月並な相手なら好いが、勝とうと思ってわざわざ内緒で準備したり訓練したりして來た相手であった場合は忽ち負けることがあるように、顔というやつも、月並な世界で月並に張り合っている月並な關係においてのみ持ちこたえられるので、この「月並み」というルールを守らない相手に相對するということ、たちまちどっちの方へ向けたらいいかわからなくなって、女の人だと大抵下へ伏せる、男だと下と横との中間、即ち両方から約四十五度ぐらいのところへ伏せて、それでもまだ恰好がつかないと右手を頤あるいは頬の下の方へ持って行く。女の人だと、肩と頸とを一ミリか二ミリばかり乳房の方に向って收縮させます。——此の表情は、あきらかに「私とあなたとは、顔は両方とも普通の人間の顔をしているから、実は今の今まで安心してつき合っていたのだが、あなたの顔のうしろにそういう正体がかくれていたとすると、これはもはや今までのように無邪氣にあなたと一緒に顔をならべているわけに行きませんから、さしずめ先ず方向を變えることによって、戦列を脱落し、戦闘不能に陥ったことの表示と致します」という意味で、つまり白旗と同じ、要するに「負けた」のです。

ひどく厄介な詮索になってしまいました。これから實はクソ勉強の讚美を一席やろうと思うので、前座として先ず悪口を云ったわけです。

社會は月並み —— 汝は月並みなところで
引っこむべからず！

泥坊とか詐欺とか云ったような、いわゆる「わるいこと」をしようと思ってかかっている人間仲間に云わせると、社會というやつは、とにかく隙だらけなんだそうです。そうでしょう、まさか人を見れば泥坊と思って朝から晩まで用心して歩いている人間は千人に一人といない。九百九十九人までは、人を見ればやはり人だと思って歩いている。大事なものは抽斗に入れて錠をかけるが、机ごと持って行く手があるという所へまでは氣がつかない。栗するに、犯罪者から見れば、世間というやつは甘いものです。月並みの一段下を行く人殺しや泥坊にはどうせかないません。殺されてから後になって急にさわぎ出すぐらいなもので、殺されない方法という奴は絶対にないらしい……

泥坊や人殺しばかりではありません。金を溜めて出世する、いわゆるガッチリした男に云わせても同じで、世の中というやつは實に隙だらけで甘いもんだそうです。もっとも、御自分が隙だらけでお甘い人間は、儲けただけで直ぐ飲んじやったり、「旦那」と云われて喜んで飲み屋へ引っぱり込んで振舞ったりなんかするから金の溜りようがありませんが、本當に金を溜める男は「旦那」ぐらいでグニャツとならない。「おれは旦那じゃねえんだ、何をこきやがる！！」と思って掛かっているから、料見が全然ちがいます。普通の人間みたいな顔をしているから普通の人間だろうなどと思って尻尾を振りながら附いて行くと、何處へも寄らないで、市電の停留場でさよならと來る。一緒に乗ったってダメです。切符を二枚買わされるぐらいな

もんですからな。こんなのが社長になったら大變、—— そういう會社に使われている社員らしいのがよくおでん屋で飲んで社長の悪口を云っているのに出くわしますが、私は隣で聞いていて、「君がたは甘いね……」と云ってやりたくなる……

これを『頭でやる仕事』の世界へ置き移して考えてみても、這般の關係は全然同じで、その事をこれから書いて見たいと思うのです。

人が普通やりそうなことを普通にやって、そうやっているうちに何かの間違いで成功しよう、という行き方……これも一つの行き方であることは、小生充分にみとめます。ただ、この行き方で行くと、とても競争者が多くて、ちよっとその邊を見渡しただけでもあんまり大勢ゴロゴロいるからイヤになってしまいます。日本だけでもチョット八千萬人ばかりの候補者があったんじや、こりやあチョット当選の見込みがありません。よほど自信でもあれば格別、僕なんかとてもそんな自信はないです。おそらくは、そういう行き方でやっている人は、とても自信があるのでしょう。天才型というのはおそらくそういう人達のことを云うのだろーと思ひます。八千萬人の天才を擁する日本……日本もまた萬歳なるかな、ですな。

氣の弱い普通の人間は、即ち凡才は、そういう風には考えないでしょう。凡才はどうせ何かこうウント凡才らしいことを考えます。自分に自信がないから、世間をそう甘くは見ないのです。そして、「おれは世間を甘くは見ないぞ！」という決意を以て世間に相對峙すると、どうでしょう、ここに世間という奴の本質があるのじゃないかと思うのですが、「ナーンダ、世間てものはこんなにも甘いものか！」というところに忽ち氣がつくのです。

正業を捨てて犯罪者の仲間になつた男が振りかへて此の月並みの正業の世の中を打ち眺めた瞬間、—— 人間をやめて單なる財産集積機として居直つた男（たとえば貫一！）が腕によりをかけて、よりの掛からない腕だらけの此の月並み社會を打ち眺めた瞬間、—— 通り一ぺんの勉強家であることをやめて、一万人に一人もない「クソ勉強家」であるべく決心した男が、そのへんの普通の勉強家ばかり寄り合つた毒にも藥にもならない：學校とか何とかいうところを打ち眺めた瞬間、—— この三つの瞬間には、期せずして共通なものがあります。それはとりもなおさず「世間というやつは、實に甘い、到る處隙だらけだ。」という此の認識です。

もっとも、人殺しや泥坊の場合にあつては、甘いのはほんの一時で、あとになると可成りからいことも起つてきます。ところが、金を溜めるのと勉強を溜めるのとは、溜めては不可んと云う法律がまだ出來てないせいですか、いっまで溜めても新聞も騒がず警察も動かない。お話にならないほど甘いというのはつまり此の点です。

ただ人殺しには滑稽な一面は付き纏わないが、ガッチリ屋というやつには、必ず多少滑稽な一面が付きまといまふ。これだけが缺陷と云えば缺陷ですな。しかし、これはやむを得ません。八千萬人の競争者と同條件で肩を並べても凹たれないという自信たっぷりな八千萬人の天才から見れば、ガッチリ屋とか糞勉強家とかいったような地下にもぐるタイプは、もちろん滑稽千萬な代物であるに相違ありませんからな。とにかく、天才には何と云つたつてかないません。八千萬人もいらッしやると、なおかなわない。まあ、黙って笑われておくことすな。

そもそも人間が手足を勞して成し遂げる仕事、即ちいわゆる筋肉勞働というやつには、おのずから限度というのがあります。どんな精力家だって、まさか人の三倍働いて三倍のお給金を貰うことは絶対に不可能です。また、三倍働かなければ三倍の給金が貰えないというところに致命的なせちがらさがあります。

世間は、筋肉勞働に對しては實にせちがらい —— 精神勞働に對しては實に低能と云つていいほどお甘い。
--

ところが、精神勞働の方はそうではない。たとえば技術者や學者や芸人などになると、人よりもほんの少し傑れているというだけで人の三倍も四倍もの収入があることになる。

それはマア話があんまりロコツだが、實際のところそうなんです。つまり世間というやつは、學問とか腦力とか藝能とか技術とか經驗とか識見とか肚とか信用とか名

望とか、とにかくそう云った精神的な即人格的存在に対しては、だいいち計量も単位もなければ標準もないものだから、實に何と云って好いかお話にもならないほどチャンリンなんです。チャンリンというのは親馬鹿チャンリンの後半部を切り離れた新造語ですが、單に「おめでたい」と云ったのではとても云い足りないから「チャンリン」とでも云うより仕方ありません。

乗ずるべき隙は此處にあるのです！否、乗ずるべき隙は此處にしかないと云った方が好いでしょう。

ひどく實利的な見地だな……と云って、そもそもこうしたゲスな考え方をすることに對して反発するお上品な人も相当多いと思いますから、此の際ついでにハッキリ申し上げておきますが、そもそも人生哲學なるものは、たとえば生理學教室と似たところがあります。交接と妊娠の生理を説こうという時に、壁に大きく生殖器の図を掲げるのはあたりまえじゃありませんか。これをワイセツだという人があるとしたら、その人の方がむしろワイセツなのではないでしょうか？生殖器があつて初めて人生のあらゆる美しい上層建築がその上に盛り上がる——実利的見地と生存競争に勝ちぬく心構え、即ち健全なたくましい利己主義があつて初めて、健全なたくましい道義の世界がその上に築き上げられるのです。（お上品なヒョロヒョロした道義の世界はどんな物の上に築き上げられるか、私は存じません。）——その逆ではありません！たとえば美しい男女関係を基礎として其の上に生殖器が築き上げられたり、高速なる理想を基礎として其の上に健全なる実利的見地が乗つかたりするなんてことは私には考えられない。

要するに、乗ずるべき隙は此處にあります！世間は、筋肉労働というやつに對してはとてもせちがらくて、5に對しては5、6に對しては6を酬いるきりです。うっかりすると6に對して5で酬いようとすらしめます。ところが、精神労働に對しては規準も何もない。凡庸だと見るとハナもひっかけないが、凡庸を少し抜いていると見るとモウすっかり天才扱いにする。数学的に表現すると、たとえば65点か66点ぐらいのところまでは0点と同じ扱いをするが、70点となると、もう80点90点100点と殆んど同じに見るのです。つまり入學試験と同じことです。だから、たとえば技術者か學者になったとすると、69点の頭の男は落第で一家心中、それより1点上の70点の男が斯界の權威として威張れる……ということが生じるわけです。すると、その1点か2点の差をどうして稼ぐか、ということが切[さ]し迫った大問題になって來ますが、これが私の此の記事の中心眼目なんですから、まあ焦らずにゆっくり話を聞いて下さい。

要するに、更に申し上げますが、乗ずる可き隙は此處にあるのです。筋肉労働の側から見ると、社會の提供する可能性は、たとえば職業紹介所の帳簿に載っているだけの数しかない。それ以外はパンパンになるぐらいのものでしょう。ところが、頭でやる仕事となると、誰もコントロールしていないから（またコントロール出来るものじゃありませんから）何處を見ても無限の可能性が提供されています。無限の可能性といえは、しばらく前までアメリカ大陸のことを欧州人は **Das Land der unendlichen Möglichkeiten**（無限の可能性の国）と呼んでいました。今ではモウだいぶ押しつまって、必ずしも無限ではないかも知れませんがとにかくアメリカという国は、天然資源にも恵まれ、その割に住んでいる人間は少なく、社会層は動いており、多少とも頭の働く人間なら、どこへでも進出でき、あてずっぽうに三つの扉をノックすればその一つは必らず開かれる……といったような国だったから、そう呼ばれていたわけです。今ではもう、世界中どこへ行つたって、無限の進出可能性を提供している国なんてのは無いでしょう。もしあるとすれば、それは「精神労働の世界」です、「頭の国」です、「學術の分野」です、「一芸一能の社會」です。

アメリカは遠い。しかもモウそろそろ無限の可能性はおしまいです。——「一藝一能の國」は近い。あなたの鼻の先にぶら下がっている。しかもその無限の可能性は、だらしなく解放されて、謂わば此の世智がらい世の中の只一つの盲点を成しています。此の盲点を狙わないという手はないでしょう、どうです！

結論：何でもとにかく、はたの者が苦笑するような行き方をせよ！
學術の世界においては、それは即ちクソ勉強である。

では、此の盲点をどういう風に狙ったら好いか？

普通で行ったのでは駄目だということは、すでに先程云った、69点だと社會の下積みになって一家心中、70点だと斯界の権威者というハッキリした一線が劃されていると云う事実からも直ぐわかると思います。ところが、幸いなことには、あなたの競争者の大部分は、みんな「普通で」行こうと思っている人ばかりで、特別で行こうなんて思っている人は極く少数です。思っている人が極く少数なところへ持ってきて、實際やる人に至っては一萬人に一人あるかなしですから、此処にも亦第二の乗すべき隙があります。社會は甘い、と云ったのはつまりこういうところなんです。これを舐めないという手はない。どうです！

特別で行く、というのは、たとえば、勉強の場合で言えば、要するにクソ勉強の道をえらぶことです。何でもとにかく人が見て苦笑するようなことを平然として、ケツをまくってやってのけるのです。一度や二度やってのけたって駄目ですが、十年つづけてやってごらんなさい。はたの人は、はじめの中は苦笑しているが、そのうちには、やがて笑えなくなる時がやって来る。笑えなくなった時に、ちよっと其の顔をこちらから拜見すると、失禮な云い方だが、實におもしろい。此のおもしろさだけのためにでもチョット十年間茶目いたずらにやってみるだけの値打ちは確かにあります。苦笑がすっかり解消してしまった後は、見直されたり、お世辭を云われたり、尊敬されたりで、また例のくだらない世間的なてんやわんやに移行するだけの話で、むしろ馬鹿々々しいことになってしまいましたが、苦笑がスカを喰って宙に浮いた瞬間、すなわち所謂「笑えなくなった瞬間」というやつだけは實に溜飲が下がるほど面白い。人間として生れてきた以上、これだけは是非一度自分も満喫し他人にも満喫させてやりたいものですね……

以上がクソ勉強の序論、あるいは初級篇です。次は中級篇で、クソ勉強の実施法、並びに「頭がよくなる方法」を説きます。頭の外部にパーマをかけるのは、これは美容院の方へ行って頂かなくちやなりません、頭の中にパーマを掛けるのはどうしても次の方法に依るの外はないのです。

糞勉強によって冴えた頭が本當の頭である。

これからの話は、なるべく直接間接に語學に關係して述べることにします。但し「なるべく」です。厳密に語學だけに関してではありません。

覺悟と決意とを以て坐れ！（毎日が試験の前夜）

勉強と戦争とは甚だ相似たものがあります。昔は、国家總力戦なんてものはなかった。今は勝つためには凡ゆるものを動員します。科學も底の底まで動員するし、經濟も底の底まではたく、思想も女の貞操（スパイなど）も、苟しくも利用價值のあるものは全部動員します。思想と女の貞操だけは速慮して動員しなかったなんて國があったら、その國は、思想と女の貞操を動員した國には覲[てき]面に負けるというのだから、おそろしい世の中です。

ところが、勉學の世界となると、このおそろしい現實の可能性に對してハッキリした認識を以て臨み、最後の最もエゲツない手段に訴えても人に勝つという心構えでもって自分の心境をスッキリと割り切ってしまうだけの冴えた頭を持っている人が存外すくない。すくないだけに、虚を衝いて進出するには絶好のチャンスです。

まず、早い話が、毎日毎晩を學年試験か入學試験の前夜だと思って勉強することです。はたの人々にはずいぶん迷惑も掛かることと思いますが、その点はモウ、多少心を鬼にするしかありません。あたりまえの事をやっていたんじやあ、あたりまえにしかない、おれは特別で行くんだから、長くとは云わない、マア十年辛抱し

て見ていてくれ、……と、マアこういう風に云って當分我慢してもらうんですな。ボンヤリと机に向った一時間と、覺悟と決意を以て坐った一時間とは大変な相違です。一年に統計してごらんなさい、五年に統計してごらんなさい、いや、十年に統計してごらんなさい！十年後には、凡才と天才の違いとしてその差がはっきりと現われます。

根気がつづかない、という人があるかも知れません。そもそも人間の本性から考えて、そうした、每晚試験の前夜と思って眼の色かえていきり立つなんて無茶なことが、一週間と續くか……と云う人があるかも知れません。そういう事を云う人に對しては、ハッキリと次のように云うことができます：『それは決意の深さによって決する問題です。たとえば、あなたのような疑問をお抱きになる方だったら、おそらく三日とは續きますまい。三日續いたら僕が十万圓の小切手を切ります。』と。-----それに、そもそも、意志薄弱な人間がこれからの日本に一人前に生きて行けると思うのがとんでもない間違いでしょう。現在の狀勢から行けば、末はどうせ一家心中ですから、罪もない妻子を殺したりなんかしないで、若いうちに早く何処か其のへんの枝ぶりの好い松にバンドをゆわえて首を釣った方が、はたも助かるし本人も助かるでしょう——とにかく意志薄弱という奴だけは困りものです。世に凡そ同情の餘地なき病氣があるとすれば、それは即ち意志薄弱だと私は云いたい。

しかし勉強は勉強、頭は頭。(人生の苛酷な現實)

ここで少々不愉快な雑音を入れますよ。そして、この雑音の征服が此の稿の目的とする最後の輝かしい結論に直結して來るのです。

婦人を見て、頭っから考えることは、美人に生れた人と、そうでない人との間に存する、嚴然たるハンディキャップです。ほんとに神さまというものがあつたら、こうはならないだろうと思うほど、その殘酷さには心を打たれます。同じことが好い頭と悪い頭との差についても云えます。この方は目に見えないだけに、考えれば考えるほど、問題が根本的で、厄介です。

すると、頭の悪い人間は、いくらクソ勉強をしたって高が知れている、頭の好い人間が少し勉強するのと、同程度か、あるいはそれより少し下廻った結果しか得られないのじゃないか……という疑問がおこって來ます。また世の中の大抵の人は現にそうしか思っていないようです。クソ勉強は、つまり頭の悪い人間が、頭の代用としてやる行き方ではないか？「足りないところを努力でおぎなう」という通り言葉もある通り、クソ勉強というのはつまり、そう云った意味の代用品ではないか？

大抵の人はどうもそう思っているらしい。だからつまり苦笑するのでしょう。ところが私の云うのはそんな消極的な意味ではありません。クソ勉強は、むしろ頭がよくなるための(一方便ではなくて}唯一の方便であるということをおうとしているのです。もし紙面の餘裕があつたら、生れながら好い頭なんてものは學問界では上へ行くほど用をなさなくなる、クソ勉強に依って冴えた頭でなければ本當の頭ではない、という最後の問題にも觸れてみたいと思います(が此の方は紙数の上でどうか-----?)

然し そうした結論に達する前に、此の「勉強は勉強、頭は頭」で、兩者は全然別物であつて、當面何の關係もない、という苛烈な現實の姿を、モウ少し深く見きわめて頂かないと、私のいわゆる「頭の素質を根本から變える方法」というやつは、なかなか腑におちないだろうと思うのです。

勉強と頭の間には、たとえば寫眞機でいうと、レンズと乾板との間に於けるような關係があります。「記憶力」と一口に云いますが、物を覺えるときに我々の頭がどう働くかということをよく考えて見ますと、覺える瞬間の「注意力」はこれは寫眞で云えばレンズのようなもので、いくら頭のよい人でも、レンズがボンヤリしていたり、ピンボケになったりしたのでは、ハッキリした寫眞は撮れますまい。それとは反對に、いかに好いレンズを用い、いかにピントをよく合わせても、背後にある乾板が駄目だったら、これはモウ全然写真にならない、即ちどんなに志を立て、どんな決意を以て机に坐り、毎瞬毎刻どんなに緊張して書物を睨んだところで、意識

の背後に控えた乾板、すなわち「あたま」と俗に云うやつが薬が悪かったりインチキ乾板だったりした日には、勉強の意氣壯なりとは云え、生得の鈍根如何ともすべからず、マア、大した効果は舉りますまい。

つまり、クソ勉強クソ勉強と云ったって、クソ勉強は結局写真で云えばレンズのピントを一生懸命によく合わせるといふだけの話ではあるまいか？決意決意と云ったって、それは結局レンズを取りかえろ、といふだけの話ではあるまいか？-----いちばん肝心の、うしろの乾板をとりかえる方法が発見されなければ何にもならないのではないかとええレンズをどう取り變えたって、まさかレンズがよくなったために乾板までよくなるということはないだろう？……

ごもっともです。レンズをいくら取りかえたって、ピントをどんなに一生懸命に合わせたって、そんなことによって背後の乾板に何等かの好影響を興えることの不可能なことは、たとえば気温計の水銀を下げることによって大氣そのものの気温を下げんとする、あるいはガラス板の外部から叱咤激励することによってパチンコの玉を思ふ穴へ入らせようとするのが不可能なのと大体マア同じことです。但し「寫眞機」のレンズと「寫眞機」の乾板とに關する限りにおいては、ですよ！人間の頭の場合にはちがいます！人間の頭の「意識」というレンズと、その背後に潜んでいる潜在意識という暗室の中の「記憶力」という乾板との間の關係は、搬般の模様が多少ちがっているように思われます。話は多少大きくなるが、だいいち人間がまだ高等動物でなかった時代、即ち昆虫とか魚とか、或いはモット過去に遡ってアメーバであった時代のことを考えてごらん下さい。最初はレンズに相當する物もなく乾板に相當するものも勿論なかった、そのうち、だんだんと発達して、何が最初に出来たかというに、私は、それはまず不完全なレンズと、不完全な乾板であったと思います。その次に、レンズが段々と完全になり、乾板が段々と精巧の度を加えるに至ったのは、決して寫眞機の場合に於けるが如く、別に技術者みたいなものが居て(すなわちたとえば神さまとか何とか云ったような者が別に居て)横からレンズを取り替えたり乾板を入れ替えたりしたのではなくて、ただ極く自然の勢で、レンズが乾板に作用し、乾板がレンズに影響し、両者がお互いに揉み合い苦しみ合い悩み合い曲げ合いいきみ合った擧句現在のようになって來たのではないかと思います。

勉強と頭とははたして別物か？

もちろん、そうした進化論が、そのまま個人の五十年六十年の一生涯にあてはまるわけではありません。けれども、「すべては流る」と謂われる此の世の中の一部である以上、比較的固定したかに見える「個人」という生体といえども、「動きつつある何物か」とであるという點に於ては、やはり一般進化論の理法に服するはずで、十年たてば世の中もずいぶんと變るやうに、十年たてば個人も相當「素質」そのものが變るのです。四十五十になった中老ではもう駄目ですが、二十代三十代の人ならば、十年たてば、鈍才が天才になり、天才が鈍才になるくらいの事は、お茶の子さいさい、朝飯前のことと思つてよろしい。しかもそうした素質の變化が、大抵の場合、成り行きのままに打ちまかされている！これは實におもしろい事實です。要するに、若い頃の決心如何によって、人間は、天才にでも凡才にでも、どちらでも好きな方になることができる。その點に關して責任を持って指導するのが本當は國家の教育なるものの任務なのでしょうが、それは單なる理想で、社會の現實としては、そんなことは此處一萬年や二萬年の將來には到底望むべくはない。また、社食や國家がそんなことをして呉れるのを待っていた日には、かなり待ち度があるでしょう。-----此の點は、現在の社會においては、全部「本人自身」の決心に任されているのです。國家はあなたが天才になることに對しては、賛成もしていない、反對もしていないのです。その代り手伝つてもくれません。

頭は勉強によって冴える

とにかく、敢えて進化論まで引き合いに出すまでもなく、吾人の頭というやつは、決して固定した宿命的なものではなく、長い年月の間には、だんだんと變って行くものだということは、長い眼を以て自分自身を観察し、また自分の周囲の人間の生長を見守っていれば、ハッキリわかる現実の事実です。「變って行くもの」であるなら、意図を以て之れを「変える」ことも出来るはずで、まさか青のものを赤にしたり、白のものを黒にするということはできないかも知れませんが、鈍いものを鋭くしたり、狭いものを廣くしたり、濁ったものを澄ませたり、沈滞したものを活発にしたりすることは出来ます。一年や二年では出来なくても五年十年の間には出来ます。

此の『一年や二年では出来なくても、五年十年の間には出来る』という或種の領域に、冴えた眼を凝と向けて物を考えようではありませんか。『点滴石を穿つ』とか『塵も積れば山となる』とか云うことを言いますが、私の云っているのは、そんな事ではありません。これらは単に量のことだけを考えて云った金言で、塵が百噸[トン]つもったら百噸の山になるなんてことは、別に改めて承わらなくたって、阿呆にもわかることです。私の云おうとするのは、奇論みたいだが、塵が 99 噸つもったら、それはやっぱり単に 99 噸の塵にすぎないが、もう 1 噸ふえて 100 噸になると、それはもはや 100 噸の塵でなくて、100 噸の金剛石であるということ……少し譬えが目茶苦茶かもしれませんが、要するにつまり、『量は質を変える』ということ……というよりはむしろ、量は、『或種の大量に達すると』質を変える、ということ云っているのです。

更に申します：『一年や二年では出来ないが、五年十年の間には出来る事柄が人生には存在する！』と。-----それはどんな事柄か？それは、普通世間で『不可能事』と呼ばれている事柄です。或いはまた之れを『奇蹟』とも申します。両方とも、名前に偽りはありません。如何となれば、一年や二年では本當に不可能事なんですから。如何となれば、五年十年の後に見ると本當に奇蹟なんですから。

現代に奇蹟なしと云う勿れ。『時』を味方とする者にとっては奇蹟があります。不可能、不可能と云う勿れ。『年月』と共謀して地下を潜行する者の辭書に不可能という項目はありません。

吾人が五十年の生を享けた此の宇宙、此の人生、此の身体、此の頭は、氷劫の過去から永劫の未來にかけて、生者必滅、会者定離、萬象流轉、いわゆる『凡ては流る』の理法の下に、時々刻々、その根底から動揺しています。今日の吾人はもはや昨日の吾人ではないのです。明日のあなたはもはや今日のあなたではないでしょう。社會も、人情も、身も、考えも、眞理も、凡てが流れ流れて底止する所を知りません。我々はただその流れに押し流されて行くだけの話です-----けれどもです！

けれども-----此處に只一つの救済の道があります-----けれども、押し流されて行く者に共通な法則として、巧みにチャンスをつかみさえすれば、これぞと思う流れに乗ることが出来ます。一たんこれぞと思う流れに乗ってしまえば、あとはもう自働的に推進されます。推進されまいとしても推進されないではいけないのです。『すべては流る……チャカホイ……』と鼻唄を歌ってればよいのです。

乗ってからは樂ですが、問題は如何にして乗るかです。泳いでいる人間なら、ヒョイと身体を變な具合にひねるでしょう。烈風に弄ばれる飛鳥もやはりなんだかそんな變なことをやっています。我々の當面の問題は「我々自身の心」というやつで、此の「心」というやつを、しかも「心」自身が、何の手がかりも足がかりもない、われ自からの虚空の眞只中において、われ自からの力と「いきみ」と工夫とに依って、その力自身であり「いきみ」自身であり「工夫」自身であるところの我れみずから其の者を変な具合にグイッとひねる……というのだから、ちよっと聞くと大變な話ですが、事實はとても簡単で、平たく云えば要するに不退轉の決意を固めよ、というだけの事にすぎません。汝自身の横っ面を張り飛ばして起て、そうしたら大抵の事は出来る！

更に申しましょう：『一年や二年では到底出来ないが、五年十年の後には出来る事柄が人生にはある-----ただそれには不退轉の決意が先決問題である』と。それは一たいどんな事柄か？それはたとえばクソ勉強によって天才になると云ったような事柄です。一年や二年のクソ勉強は……要するにクソ勉強です。鼻持ちがなりません。なぜ鼻持ちがならないか？それは一年や二年だからです。これに反して五年十年の糞勉強は素質を変えます。-----一年二年は量を変える、五年十年は「質」を変える、此處です。

最後にもう一度申しましょう：『一年二年では到底出来ないが、五年十年後には出来る事柄が人生には存在する-----かるが故に汝自身の横っ面をはりとばして起て！』

記憶と理解の基礎は『関心』

語學はなにしろ量の征服が当面の問題ですから、記憶力の強弱ということが決定的重要性を帯びて來ます。理解力と感受性と創意力がその次に問題になって來るのですが、記憶力のない理解力や感受性は、語學に於ては(語學だけではないかも知れませんが)大した効果は挙げ得ません。-----そこで、糞勉強がどうして頭の素質變えるかという典型的な一例として、まず記憶力の増進がどういう具合に行われるかということを考えてみましょう。

よく物事をハッキリ考えない人は、人間の脳の中に「記憶力」という特殊な独立機能があって、それが人によって強かったり弱かったり、時と場合によって鋭どかったり鈍かったり、事柄によって得意だったり下手だったりするように思っています。むろん、結果としてはそういう事になるかも知れないけれども、其処には、一段奥に潜む根本的事實が見逃がされている：即ち「関心」という事實がです。

手っ取り早い話が、ドイツ語の小説か何か読んでいて、自分はどんな種類の單語はすぐその場で飛びつくように覚えてしまうか、どんな種類の語は何べん同じ語を辞書で引いてもまた直ぐ忘れてしまうか、ということに注目してごらんになると、おかしいほどよくわかります。とにかく、覚える單語は一度で覚えるが、覚え不了單語は何べん聞いても忘れず。これは何故でしょう？偶然でしょうか？單語そのものに、頭の中でよく掛かってとまってしまふ、いわば鉤の手のようなものが出ている單語と、ツルツル滑って出てしまふ円い單語との別があるのでしょうか？まさか！-----原因はあなたの頭にあるのです。関心のある單語は飛びつくようにおぼえる、どうしても好いと思つた單語は單語の方でもよく知つていて、すぐ出て往つてしまふのです。問題は乾板です。

初級の教室で教えていると、**hinstellen** は「それへ・置く」だと云つても、誰も感興が湧かないと見えて、ただ漠然とした眼つきで此のスッキリしない髭文字を見送っている。関心がないらしい。ところがその次に **Bahnhof** (駅) というのが出て來た。これは普通の重要單語だ、と思つたかしら、あちこちの鉛筆が一齊にサッと動く。中級或いは高級の教室。**zum Stehen bringen** は「立ちどまらせる」だと云つても、大抵の人は「何云つてやがる、立ちどまらせたけりやア勝手に立ちどまらせるがいい……」と云つたような顔をしている。その次に **Dauerwelle** というのが出て來た。『これがいわゆるパーマ、即ち **permanent wave** です』と云つて笑うと、さあ大變、滿堂の聴講生(殊に婦人の全部)がサッと前に頭を傾けて「パーマ」と鉛筆で書き込むところは、なんてことはない、まるで稲田の上を秋風が撫でる様……

ほとんど一言もわからないドイツ語のトーキーを見ている最中に、或る文句、たとえば **zum Stehen bringen** (とめる) だけがいやにハッキリ聴き取れて、しかもそれが、たとえば暴走する機關車に飛びのつて衝突の寸前に危うく **zum Stehen bringen** したところだったりすると、一句がわかつた、という得意な氣持(関心！)のために、此の句はまるで石に刻んだように乾板に焼きつけられて、あたりまえなら百ぺん読んでも百ぺんとも忘れてしまふはずのものが、一瞬にして記憶に印し、しかも一生涯忘れないでしょう。得意も関心です。

輪講などしているとよく起る光景ですが、友達同志よく議論をする。その際問題に

なった文、句、語は、元來別に大して関心も何もなかったものでも、偶然問題の焦点になって、男の自尊心にかけて言って争って……遂に負けた、なんてことになる、こいつも口惜しいから一生おぼえています。自尊心の対象となるものは、たとえどんなものでも関心の的となり、関心の的は、一週間試験勉強で頭痛鉢巻したよりも以上に記憶に焼きついてしまうものです。

関心が如何に頭を鋭くするものかという實例は無限にあります、なお一つ私自身の昔話をしておきましょう。陸軍士官學校にいたときのことですが、私はいったいカンニングなんてことはやらない正直な生徒でしたが、たった一回だけやったことがあります。たしか築城學の試験でした。全然本をあけてみたこともない課目なので、困っていると、あるおせっかい屋が、そんなら助けてやろうと云って、自分の答案を二十分ぐらいで出して、教室を出て、私の教室のすぐ窓のところに大きな木の幹にかくれて、大きな紙に、大きな字で、1 がこれこれ、2 がこれこれ、と書いて、監督者の隙を見ては、その紙をこっちに向けて見せてくれるのです。ところが、長い間紙をこっち向けているわけには行かないので、監督の下士官が、向うを向いて歩いている間にちよっと見せ、こっち向きそうになるとすぐまたかくして樹の向うへ廻ってしまう。まあホンノ五六秒の間に相当の仕事をしなければならない……けれども共の時に私はつくづく感じました、イチカバチカの試験ともなれば、かくも頭がよくなるものかと！とにかく、五六秒のうちに、グツト緊張して、遠くの紙に書いてある文句を、しかも成るだけ速くサッと読みおろしただけで、しかも一回読んだだけで、しかも興味もなにもない初めての言葉や概念が、さながら待ってましたとばかり記憶に焼きついて、自信を以て立派に書きつらねられるのです！-----とにかくよほど渾身の緊張をしたとみえて、四十年以上も昔の事なのに、その紙までハッキリ覚えています。

人間の関心(Interesse)という奴ほど正直なものはありません。横着千萬というか、イケ図々しいというか、とにかく箸にも棒にもかからぬほど正直で、恬然として持ち前の根性通りを丸出しにします。これが先に譬えとして引合いに出した「乾板」の正体なのです。潜在意識という暗室の中にある乾板です-----かるが故に哲學者 Heidegger は、「人間の本性は関心である」と云い切っています。(Heidegger は Sorge: "執" または "慮" "おもんばかり" という語を用いているが、指す所は大体同じ見當です)

関心が向いている方面に對しては人間は誰しも頭がよくなるが、痛くも痒くもない事柄に對しては時とすると薄馬鹿と云われても文句のないほど頭の働きの純い。學校では一向算數のできなかった兒が、小憎に出されて、主人の金をゴマ化して嘘を吐く段となると、おそらくは學校の先生などには想像のつかないほど頭が働く。今までは友達づき合いすら碌にできなかった男が、何かの機みでクラス委員にされ、みんなにおだてられて嬉しくなると、人の世話が面白くなって、學校を出る時にはもう一廉の政治家になっている、などということは、私も約三十年ばかりの教師生活をしたおかげで度々見たことがあります。愛は盲目にし、嫉妬は炯眼にする、などというのもやはり同じ関係でしょう。

記憶と暗記力の問題になると、搬般の關係はむしろあまりにも現金すぎておかしくなるほどです。試みに、毎日毎日接したり、紹介されたり、話したりする多くの人のうち、どんな人の名前を忘れるか、どんな人の名前がハッキリと記憶に残るかを反省してごらん下さい。関心のない人の名前はすぐ忘れてしまうが、何か嬉しいことのあった人とか、或いは反對に、何か不愉快なことのあった人の名と顔はハッキリと記憶に印します。

意識的にわざわざ覚えようなどと思って努力した名前は、努力は殊勝であったにしても、その割に覚えてはいないものです。要するに吾人の潜在意識という暗室の中にある「関心」という乾板ほど正直な、現金な、横着な、いけ図々しい、箸にも棒にもかからぬ、お里丸出しの、頑冥不靈な野獸はありません。人間は、表面の意識はどんなに発達しても、教養を積んでも、そもそも理性とか意識とか思惟とか云ったものはすべて前方のレンズにすぎず、背後の暗室は水久に本性丸出しの意馬心猿なので、殊に語學などと云うロコツに暗記と記憶が問題になる仕事では、最も致命

的な「記憶の明確度」というやつが全的に此の暗室の方からして決定されるのです。

心の作法

極言するならば、頭に良し悪しはない、関心に強弱あるのみ、と云ってよろしい。天才とは、即ち、旺盛なる関心のことです。そこでいよいよ関心の刺戟法ということが当面の問題になってきます。如何となれば、人生はなにしろ非常に短かいのですから、いろんな事柄に對して鋭い関心が自然と生ずるのを膝に手を置いて待つて居た日には、到底急の間には合いません。なんとしても、みずから進んで自分自身の関心を自力によって作興しなければなりません。

これをしないと、萬象流轉の流れに押し流されるきりで、語學に関して云えば、如何にレンズのピントを合わせても、いわゆる「印象的」な単語はすぐ覚えるが、覚えにくい単語はいつまで経っても覚えられない、要するに八千萬人の日本人と同じコンディションの乾板で寫真を撮って行くとなると、こいつは実に馬鹿々々しい競争で、日に5時間勉強した伊藤さんは日に3時間勉強した山本さんよりも必ず2時間の長を持つことになり、すべてが量で規定されることになる。こんな馬鹿々々しい競争はありません。同じ3時間机に向って勉強しても、伊藤さんのは3分間の効果もあがらないが、山本さんのは10時間に等しい威力を数揮する、というのでなくてはならない筈です。「関心」の度が強くなれば、現にそういう風になるのです。関心の人爲的作興法は、愚見によれば、大別して二種類あるように思われます。第一は、『或る方面に對して一括して責任を持つこと』であり、第二は、これが此の記事の題目たる『クソ勉強』、或いは『何クソ勉強』です。

まず第一の方を述べますと、たとえば、『何でも自分のこととなるとほって置けなくなつて急に頭が働き出す』という此の生存競争裡の一大理法がそれです。人生のたとえどんな方面のことにせよ、その方面に對して、人に向つて断乎責任を取らざるを得なくなると、その事柄に關しては忽ち全面的に関心が生じ、また頭もよくなるものです。たとえば、どんなにドイツ語の面白くない人でも、之れを人に教えるとなると、忽ち面白くなります。-----

これはマア一ばん安あがりの関心刺戟法で、語學以外の學問(法律、政治)では時とすると致命的な重要さを持つことがあります。語學などとなると、そう大した効果も伴いません。なるほど、人に教えるとなると、面白くなり、関心が生じますが、その関心というのは、當面的には、單に學生を感心させたいとかよく知っていると思われないとか、過ちを指摘されてあわてるとか、そういったクダラない関心のことが多く、語學そのものに對する、或いは語學の理解と創意と蘊蓄に關する人生諸般と關係した本當の深い関心ではありません。

語學というものは、御存じの通り、人生諸般の問題に關係して來ます。そもそも言語とは何でしょう？言語とは、或る民族が何千年かの間、およそ人間として考えられるだけの「凡ての」事を考え、觀察できるだけの「凡ての」ことを觀察し、愕ろき得るだけの「凡ての」事を愕き盡し、喜び得るだけの「凡ての」ことを喜び盡し、悲しみ得るだけの「凡ての」ことを悲しみ盡した生々しい痕跡です、私が特に強調して「凡てのことを」と言う点をよく考えて下さい。二十歳前後の若い人が、人生の入口に立って、たとえばドイツ語などというものに相對する時、たとえ其の人がどんなに苦勞をしたことのある人であっても、まだまだどうして人生の凡ての事に対して鼻が利き眼が利く、いわんや関心が働くとは申せません。ところが語學はそれを要求するのです。人よりも以上に進歩し、殊に人よりも以上に速く言葉を覚えようという時には、それが必要になって來るのです。面白いと思つた語は一瞬でおぼえるが、どうしても好いと思つた語は覚えられないから、問題はすこぶる簡単で、「どうしても好いと思わないようにする」という心術が必要になつて來る、しかも「人生のあらゆる方面のことがら、どうしてもよくはなくなる」ようにする心の修養、もつとはっきり云うと、「凡てが面白くなること」が必要になつて來ます。ちょっと断わっておきますが、「凡てを面白く思おうとする」のではありません。それはレンズの方の働きです。「凡てが面白くなる」ことです。

面白いとか面白くないとか云う問題は、これが即ち關心で、意識的にはどうにもなりません。面白い事は面白い、面白くないことは誰が何と云っても面白くない。面白くも何ともない事を、勉強の上で必要だからと云って、強いて面白いと思おうなんて、そんな馬鹿な事はない。思ったって、心は正直なもので、事実として面白くもなんともならない！

よく見かける図ですが、たとえば、縦から見ても横から見ても、およそ哲學などとは何の縁もなさそうに思われる徹底的な俗物が、語学をやる以上は哲學もわからなければ……というので、どえらい哲學書を開いて、「何とか商白くなるように……」と云ったような顔をして読んでいる。苦笑ものですな。

読者諸君、我々はいよいよ最後の鐵壁に突きあたりました。吾人脳中の暗室とその乾板の正体が關心というものであるとなると、これはもはや意識的、人爲的にはどうにもなりません。顔の良悪が關心如何によるとなると、勉強によって頭の質を變えることも出来なければ、その他凡才を化して天才とする術は絶対に無さそうです。現にそんな術は未だ曾て教えた人もなければ教わった人もない。結局すべてを運に任かせるの外はない。

決心しても駄目、勉強しても駄目、修養しても駄目、その他何をしてしても駄目なことはわかり切っている。

これで大体、突きあたる所へ突きあたってしまったわけですから、ではマア大体此の辺を結論として話を打ち切って好いのじゃないでしょうか？

結論：自分の力で自分の頭をよくする方法はない。
勉強しても頭はよくならない。

この結論はもはや絶対に覆[くつが]えす餘地のない絶対眞理です。凡才と生れた人はまあ、死刑の宣告と思えば好いでしょう。寔[まこと]にお氣の毒なことだと思います。

これから先は、もう大して申し上げるほどの事ありません。青酸加里の入手法でもお講じになるか、或いは、氣が向いたら、これから一寸最後に附言する次の點に御注意なさるかどちらかです。

それは何かというと、斯ういうことです。

萬策盡きた状況の下に於て人間は何をするでしょう？いよいよ死刑と決まった男には……たとえば破獄を企てるという最後の一手が残されてはいはしないでしょうか？変な例になるが、これが此の際色んな意味で一番ぴったりあてはまるからやむを得ず申しますが、たとえば、女を口説き落そうとかゝった男は、お上手を云っても駄目、脅迫しても駄目、泣いて嘆願しても駄目、金で釣っても駄目、要するに萬策盡きたとなると……どうするでしょう？萬策盡きた後には、萬策以外の「強姦」という最後の一手があるのじゃないでしょうか？

どんなに勉強したって悪い頭を良くする方法は絶対に無い-----では我れと我が頭を強姦する、そのためには先ず關心を強姦する、(もっと詳しく云うと「レントゲンを以て乾板を強姦する」)すなわち「クソ勉強」という、全然無茶苦茶な、天地の理法を無視した、犯罪的の一手が後に残されはしないでしょうか？誰でも考えそうな、最もあたりまえの無策にして無謀なる、たくましくも直截なる此の一手が？

(さあ大変なことになって來た！殺人に譬えられ、貫一に譬えられ、戦争に譬えられたあげく、とうとう強姦に譬えられるに至っては、クソ勉強たるもの、以て冥すべしです。本望でしょう)

事実クソ勉強は、いろいろな意味に於て強姦に似ています。ただ一つだけ、後者が瞬間の快を得んとして、欲せざる結果を後に残すに反して前者は其の逆である点がちがっているきりで、其の他の点は全然同じです、少くとも多少たりとも恥を知る人間ならば、考えただけでも眼をそむけたくなるような、無理無体の細部に分けて考えられる点も似ているし、意図の如何にかかわらず後に儼然たる結果が残って、その結果がそれ自体の理法によって生長して行くという点もそっくりだし、そもそも、たったそれだけの事で、それが後になってそんな重大なことになるという事實

關係が、當事者自身はもちろんのこと、第三者にも、學者にも全然わからないと云う點もそっくりです。中でも特によく似ているのは、クソ勉強によって生じた結果、すなわち広汎英駿なる関心と天才的な頭脳という奴はちょうど、強姦のために出来た兒が、普通の夫婦關係で出来た兒と何の差別もなく、どんなに眼の利く人だって、二人の子をならべて、こっちは強姦の結果、こっちは普通、などと云って區別することができないのと同様に、生得生粹の天才と全然同じ者なのです。否、持って生れた天才よりは、クソ勉強で冴えた天才の方がずっと天才であるという範圍のことが人生にはたくさんあるのです。

窮餘の一策、などと云ってははいけません。窮餘の一策に碌な策はありません。-----また強姦の話になるが、強姦は窮餘の一策ではありません。窮策を捨てた本策です。窮策極わまって本策を生ずというやつです。すべてを失った者にして初めて「すべて」が得られるという……これが人生の弁証論です。

また強姦の話になりますが、強姦しても子供が生まれるということは誰も認めますが、クソ勉強が天才を生むという話は、どうもちょっと普通の常識ではうなずけない。私も、この點ちょっと疑問に思っ、神様の所へ行って質問したことがあります。『神様、ちょっと伺いますが、クソ勉強によって冴えた頭というのは、事貫としてはたくさんあって、むしろ天才といわれる人の大部分は實はそうなんじゃないかと思いますが、どうしてそう巧く行くのか、私にはどうもよく訳がわかりません。どういう訳なんでしょう？』と私が問うと、神様は『知らん』とおっしゃる。そこで私は『それはおかしいじゃありませんか！神様が御存知なければ、いったい誰が知っているんです？』と云って、かなりはげしい口調で結め寄った。すると神族の曰く：『時が知っている。』

最後に、くどいが、もう一度申しあげて此の稿を結びます：一年や二年では到底出来た話ではないが、五年十年の後には恰[さなが]ら奇蹟の如くに実現する事柄というものが此の人生には儼然として存在する。あたりまえで行ったのでは結局あたりまえにしかならない。おまえだけは何か人のしないへんな事をせよ：汝自身の頭を強姦せよ！
(1954 年 1 月)

『語學の勉強法をあらゆる角度から』

関口 存男

第一問：翻訳をすると語學の實力がつくのでしょうか？

答：つかないでしょう。日本語の言い廻しは上手になるかも知れませんが、外國語そのものは割合進歩しません。(厳密を期するために、少し別な云い方をするとすれば：『翻訳することによってつくような語學の實力は、それはまだ本當の語學の實力ではない』と云つても好いでしょう。もしこの解答が腑におちかねる点があったら、いわゆる反譯家と云ったような筋の人たちに訊いて下さい。)

第二問：辭書は、獨和など使うよりは、やはりなるべく獨獨を使うべきでしょうか？

答：獨獨を使って充分わかるようになったら、もちろんそれに越したことはありますまい。一語をしらべながら同時に多くの語に接するわけですからね。しかし、そこまで行くのはなかなか大変です。また、引こうとする語の種類によっては、獨和の方がずっと精確だということもあります。たとえば *Ladenhüter* (たなざらし)、*Diabetes* (糖尿病)、*Einheit* (單位)、*Eierpflanze* (茄子)、*schieben* (横ながし) など。

第三問：作文が重要だということは充分みとめますが、われわれには作文を練習す

る方法がありません。自分だけでデタラメに作って見たところで、それは反って間違ったことをおぼえてしまう位のもので、誤りを訂正してくれる人がなければ駄目ですね？先生といえども、作文となると、うっかりした先生には信用がならない気がします。そうかと云って、外人につくなどということは、誰にもそうやたらにできることではありません。どうしたら好いでしょう？

答：獨文をまず日本語にお直しなさい。そして、忘れた頃に、その日本語をもとの獨文に直してごらんなさい。これを「逆文」と申します。不自然な作文よりは自然な逆文の方がずっと効果的です。

第四問：会話の練習のために西洋人につくということはどうでしょう？

答：つける人は勿論つくべきでしょう。けれども、欲を云うならば、あなたがお金を出して西洋人につくよりは、むしろ西洋人の方がお金を出してあなたにつく可きでしょう。-----奇論をよしてわかり易く申しますならば、西洋人の個人教授を受けるということは、あなたがよほど上手に相手の先生を引っぱり廻さない限り、どうも大抵「話の種」が切れてしまって、長づきはしないものです。それに反して、何かどうしても意思を通じ合わなくてはならないような具体的な問題があなたと西洋人との間にしょっちゅう続発してくるような関係に立つということ、会話は否でも應でも上達せざるを得ません。だから、会話に上達したいとお思いになったら、まず相當の實力を蓄えたのち、何等かの機會を作って、相手が「これは重寶な男だ、利用してやれ……」とあなたに注目するようにお立ち廻りなさい。これより以外に、もし何等かの上達法があつたら、私は……焼ちゅうを五分間に一升飲んで見せます。

第五問：音盤を利用することは有効ですか？

答：有効です。但しこれには甚だ痛い條件が一つつきます。それは、音盤を本當に自分一人だけで使うことです。高価なものだから、これは甚だ痛い條件かも知れませんが、この條件でないと絶対にダメです。學校で買ったのをほんのたまに一寸きかせてもらったり、友人のを一寸貸してもらって一二週間聞いたりしたのでは、絶対に効果がありません。ラジオできくのも同様です。-----自分の部屋にそなえつけて、毎日毎日きいて、ほとんど全部を暗記して、たとえばマア例の「のど自慢」にでも出られるくらいに、流行歌のように練習してごらんなさい。非常な効果です。

第六問：單語帳や單語カードは効き目がありますか？

答：あんまりないでしょうね。-----自分で單語帳を作ってみるということは、それをタンネンに書く時の効果だけはあるでしょう。あとは、たいてい風呂にもしてしまうものです。燃された單語は大抵の場合煙突を通して屋根から外へ出てしまうとしたもので、單語が熱と共に風呂釜を貫いて浸透し、それからあなたの膚にしみ込んで大腦にまで達する……ということはまだ科學的に立證されていません。

第七問：讀破力をつけるには、短かいものを多く読むべきでしょうか、それとも一つの長い書物にあくまでも喰いさがって行くべきでしょうか？

答：私自身の經驗から云うと、長いものをつづけて読む方が實力がつくと思います。もちろん、書物には、文體の上から云っても、取扱われている問題から云っても、みなそれぞれ偏した固有癖があります。ある小説では、ある種の事ばかり出て来て、他の種のことは出てこない、ある論文では、ある一定の用語ばかり出て来て、それ以外のことはちつとも出て来ない……といったようにです。これは一つの缺陷であると同時に、また一面に於ては、語學學習者にとってはモツケもない絶好の進出チャンスを提供するものであり、云わば、さながら、ブラジルの密林にわけ入るため

に自然が作っておいてくれたアマゾン河にも似たところがあります。アマゾン河というものがあるのに、何を好んでわざわざ密林をわけて奥地に進む必要がありますでしょうか?-----というのは即ち、こういう意味です。たとえどんなむづかしい書物でも、最初の五十頁をよく読めば、あとは不思議なほどよくわかり出します。難儀は最初の五十頁にあるのです。つまり、その作家、その文体、その用語、その話の筋、その扱ってある問題、その特殊な語法に慣れるのに暇がかかるのです。(初學者は往々にして此の難關を語學一般の難關と混同して考え勝ちです)それに慣れてしまえば、こんどは、その逆の規象が起ってきます。すなわち、その書の固有癖に慣れて、「その書」がわかり易くなったということのために、學習者は、這般の問題を混同して、「そもそもドイツ語というものが」わかり易くなった様な錯覺を起してしまうのです。そして、此の(本當はチョットよくない)錯覺のために、かれの読破力は破竹の勢を以て進歩します。進歩というよりはむしろ「上すべり」してしまうのです。しかも此の「上すべり」は非常に好い「上すべり」で、此の「上すべり」と、此の錯覺がなかったら語學は絶対に進歩しません。知職は得られるかも知れませんが、力はちっともつきません。語學の底力、語學の實力というやつは、知識や明確な認識とは一寸別物です。

第八問：講習会に出たりするよりは獨學の方が好いでしょうか？講習會や教室の語學をどうお考えになりますか？

答：講習會とか、教室とか、讀書會とか、輪講とか、研究會とか云ったものには、おのずから其の利害得失があります。どんな利害得失があるかということ、それらはすべて多勢の人、或いは數人の相手と共にやることですから、すべての「社交機関」に共通な利害得失を持っているのです。-----誰しも自分の經驗に問うてみればほぼわかることですが、いったい人間というやつは、一人きりで何かやるときの頭の働き方と、相手がある時の頭の働き方との間には「種類」の相違があります。人の話を聞いたり、自分でも喋舌ったりしている時(即ち對人關係)には、或種の事柄に對しては非常に敏感になって、ひとりきりの時には考えもつかないような好い事を考えることがあります。また、他の或種の事柄に對しては恐ろしく鈍感になってしまつて、一人きりなら當然氣がつく筈の簡単なことが急には思い出せないなんてことがあります。それと逆に、一人きりで机に向っているときには、或種の事柄に對しては非常に綿密に頭が働きますが、他の或種の事柄に對しては、まるで低能兒かなにかのように、スッテンとぬけていて、肝心なことをすっかり忘れているということがあります。-----これを要するに、對人關係の仲に入つて(教室などで)勉強するということは、ヒントを授けられたり、刺戟を受けたり、或種の問題を明確に考えたり、視野をひろげたりするにはもってこいですが、眞の意味における實力を養成するには甚だ適しません。眞の意味における實力を養成するのは、何と云つても、やはり、獨學です。ひとりでムツと意識を集中して、多少獨善的になつてもよい、多少獨斷に陥つてもよい、とにかく馬車馬のように、左右に目かくしをつけて、盲目的に猪突前進することです。これをやらない人にとっては、教室の授業は大した指導にならないでしょう。これをやる人にとってはじめて教室は不可測の威力を發揮するでしょう。-----獨學は地上軍のごとく、教室ガイダンスは空軍のごとし。進歩した現代の軍備が空軍を持たないというのは重大な缺陷でしょう。しかし、第二次大戰の經驗によると、空軍だけでは絶対に敵國を攻め取ることはできません。やはり、速力のおそい地上軍が多大の犠牲をうけつつ、一步一步と敵を追いつめて行つてはじめて敵國を制することができるのです。

第九問：文法というものは、どの程度まで必要なのでしょうか？殊にドイツ語をやる者は、文法というものを非常に重要視する傾向があるようですが、これははたして正しい考え方でしょうか？

答：『文法がわからなければドイツ語は全然わかるわけがない-----文法がわかつた

ところで、それでドイツ語がわかったわけではない』 -----まずこんなことになるでしょう。よく噛みしめて考えて下さい。

第十問：自分の學力の程度よりも少しむつかしい位のものに嚙りついて、小野道風式に、わかるまで根氣強くねばりついた方がよいでしょうか、或いは、自分の學力より下のものを樂々と澤山やった方がよいでしょうか？兩者ともその特長があるように考えられますが……？

答：お説の通り、一得一失です。その人の性格によつてきまるでしょう。どちらが自分に向くか、ということ、よく判断する必要があります。この判断は、なんでもないようで、常事者自身の内部からはなかなかむつかしい問題です。私が只今までに見て来たところでは、三人に一人、あるいは悪くすると二人に一人位の割で、此の判断を誤っている人を見受けます。そんなむつかしいものを机の上に置いて、ムツカシイ顔をして、眼を充血させて、便秘したり溜息したりしながら停頓していても、もっとやさしい物をドンドンと読んだ方が性に合ってもおり、また進歩も早いだろうに、と思われるような人にかぎって、何かヘンな野心にこだわって、本人と書物とを見くらべると思わず失笑を禁じ得ないような、トテツもないむつかしい物と四つに組んで(死闘しているなら好いが)居眠りしている……そうかと思うと、もうこれくらい出来る人なら、ちっとは野心を振るい起こして、何かモットむつかしいものと取っ組んで、今まで知らなかった全然の別天地に身を置き移したら、我れと我が實力を見なおして、其処にもたらされた新境地のために、生れ變つたようなスガスガしい氣持がして、また改めて人生が生き甲斐あるものとなるだろうに……と思われるような人にかぎって、いつまでも自分の氣持の惰性に引きずられて、現在の自分に充分わかることにだけしか興味が向かず、少しでもむつかしいものに對しては本能的な反感を抱き、その結果として或種の獨善的な心境に陥入り、その為折角の勉強が何の効果ももたらさずにいるといったような人も見かけます。-----とにかく人間というやつは、何が本當に自分の為になるか、現在の自分には何が最も促進的であるか、ということに對しては、いわば積極的に心を閉ざさんとする傾向があるのです。(アラン・ポーは、この一つの面白い場合を *The imp of the perverse* "よこしまのまがつみ" [とでも譯しますか] と名づけて、同じ題の短篇で隨筆風に鋭く描寫しています。) -----以上は念のために申しあげたのですから、よく内省すると同時に、常識的立場から自分自身の振舞いを客觀的に批判して下さい。-----ごく一般的に申しますと、初學者はなるべくやさしいものを多量に讀んで勇氣と自信をつける方が順序です。あんまりむつかしいものに喰らいついて、停滯してしまうことは、よくありません。密林をかき分けて、いばらに引っかかったり、毒蛇にかまれて三ヶ月入院したりするよりは、坦々たる國道をテクテク一ヶ月歩いて廻り道した方が結局は時間の經濟かも知れませんからね。-----但し、これには一つの例外があります。それは、前出の第七問に對する解答で申し上げた、一つの長い書物にあくまでも食い下がって行く場合です。此の場合は、あなたの性に向こうと向くまいと、とにかく遮二無二、むつかしい密林を突破しなければなりません。自分の實力とは不相應な、なんなら一行に出て来る單語の九割まで辞引で引きながら、今日は一行、明日は二行、と此の段違いの相手と四つに組んで何ヶ月でも頑張らなければなりません。

第十一問：私は少し欲の深い方で、ドイツ語以外に、英語も、できることなら佛語もやりたいと思います。ただその方法なんですが、若い時から多少たりとも平行して三語をやる方が好いでしょうか、或いはやはりドイツ語だけに専念して、これを相當マスターした後に英佛にとりかかった方が好いでしょうか？

答：御質問の趣旨はよくわかりますが、そこには、あなた御自身がまだよく氣がついておいでにならない多くの根本問題が錯綜していて、なかなか厄介です。-----たとえば、あなたは、ドイツ語以外に英佛をマスターしたいと仰言いますが、マスタ

一するというのは、どんなマスターのし方のことをお考えになつての上での話ですか？もしそれが、新聞が読めたり、手紙が書けたり、会話が出來たりする程度のマスターでしたら、また、英佛語とドイツ語を同程度に翻訳ができるという程度のマスターでしたら、この方は解答は割合カンタンです。但し、あなたの生活力の旺盛さと、あなたの素質とを知つての上でないと、一ぱん的には、チョット責任を以てはお答えし兼ねます。-----けれども、一般的に云えることは、ゴク月並みなことではありますが、やはり「うっかりするとアブ蜂とらずになるぞ」……ということ、或いは、「二兎を追うものは一兎をも得ず」ということです。月並みではあるが、これは永遠の眞理です。-----ただしこれにも但し書はつきます。すなわち、もしあなたが非常に精力の旺盛な(というのは精神力のことです、体力には大して關係しません)人だったら、これはまたチョット話がちがって來ます。また、精神力の旺盛な人に対しては、ドチラを先にやった方がいいかなどと云う問題に對しては解答する必要を認めません。何から先にやろうと、そんなことはどうでも好い問題で、ただとにかくやりさえすれば好いでしょう。また、やるなと云つてもやるでしょう。

----- (終) ----- (1952 年 7 月)